

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道 気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

インターネットが図書館にもたらしたもの

富田 健市

はじめに

この紙面に掲載された、「インターネットでできること」という拙文を書いた後、1年以上が経過しました。当時、話には聞いたことがあるといったレベルだった「インターネット」も、最近ではすっかりと身近になってしまった感があります。「インターネットカフェ」などという、5年もたったら「プールバー」とか「モツ鍋屋」と同じように、昔はやっていたらいいねといわれそうな店まで誕生していますが、一方で図書館に対するインパクトは、一般社会と比較しても、むしろさらに大きなものであったと結論せざるをえません。今回は、インターネットが図書館にもたらしたもの、そしてもたらしつつあるものについて、考えてみたいと思います。

(1) 図書館における電子化の流れの中で

図書館というと、冊子体やカードの目録で本の所在を探してからカウンターに請求し、司書の人から書庫から持ってきてくれたものを貸出カードに記入し持ち出す、といったイメージが少し前までは一般的だったように思います。1995年に公開されたアニメ映画「耳をすませば」に出てくる図書館も、機械化が決まったという言葉は出てきますが、まだ機械とは縁のないものでした。そして、本の貸出カードが重要な小道具として活躍し、昔ながらの図書館に愛着を持つものにとって、ちょっとうれしい作品になっていました。

しかしながら、現実において、図書館も機械化というより電子化の流れの中にあつて、大きく変貌してきているのは、皆さんが日々体験しておられることと思います。そして、機械化というと、入退館装置や、機械貸出、電動集密書架も含まれますが、目録の機能に限定すればこれまでに二つの大きな波を経験し、現在進行形で三つ目の波を経験しているところである

と考えることができると思います。

目次	インターネットが図書館にもたらしたもの(富田健市) …… 1頁
	大図研京都数珠つなぎ(第4回/松延秀一) …………… 4頁

一つ目は、電子複写です。これによって、副出カードを従来よりも格段に簡単に作成、組み込みができるようになりました。主記入以外の複数のアクセスポイントからの検索が可能になったわけです。

二つ目は、やはりMARCでしょう。これによって、タイトル中のキーワードなど、アクセスポイントが格段に増加し、さらには、共同分担目録という画期的なシステムも可能となりました。

そして、三つ目の波こそが電子図書館であり、それをもたらしたものというか、実現させるための技術要素として大きなものの一つが、インターネットであるといえます。

現在において、「電子図書館」という言葉は、かなり流布していると思われます。文部省ばかりではなく、通産省や郵政省でも別個に実験開発が進められています。京都大学においても、電子図書館実験システムである「Ariadne」を使って、見学者の方に対して、デモを実施しています。というより、筆者自身がデモを担当しており、平成7年の年末から年度末にかけては、多数の見学者への対応に追われていました。拙文を読んでおられる方の中にも、あるいはこのデモをごらんになった方もあるかもしれません。拙い解説で、どこまで電子図書館の持つ未来をお伝えできたか、はなはだ心もとないのですが、お許しください。なお、デモ自体は、今後も継続していく予定ですので、時間の許すかたはぜひご覧になっていただきたいと思います。(できれば事前連絡をお願いします)

(2) インターネットのもたらしたものの

先ほども書いたように、インターネットがもたらしつつあるものとしては、電子図書館が大きなものの一つであることは、疑いのないことでしょう。しかしながら、電子図書館のような一つの具体的なイメージでなくとも、インターネットが図書館にもたらしたものはいくつもあります。これらは、「対象の拡大」という言葉でまとめることができるかと思えます。

まず、扱う対象の資料の拡大があります。従来の図書館業務システムが、書誌の文字情報だけを扱う場合が多かったのに対し、書誌ばかりでなく目次や全文データまでを扱い、さらには文字情報だけでなく、画像情報や音声情報までを扱えるようになりました。現在は、特殊コレクション等の電子展示が目立つ程度ですが、今後は、目次や全文からの検索等、業務ベースでのサービスに積極的に取り込まれていくことと思われます。

次に、サービスする対象の範囲が拡大しました。従来は図書館(室)にきた人が主なサービス対象で、自宅や研究室からはわずかにOPACが利用できた程度でした。それが実際に図書館(室)にきたのとほぼ同じだけのサービスを、自宅、研究室、さらには移動端末があれば屋外においても受けることができます。そして、サービスエリアも、国内ばかりでなく、全世界に拡大することとなりました。

また、サービスする対象が拡大したのと同じように、情報を収集する対象も拡大しました。海外の大学図書館の蔵書検索等は、今では業務として毎日のように行っている方も多いことと思います。さらに、大学図書館ばかりでなく、書誌ユーティリティや出版社、学会、あるいは個人の研究者自身でもインターネットに情報を発信しています。しかも、アップデートは頻繁に、それこそ秒単位で行われており、最新情報を維持するためには日常

的にかなりの頻度でアクセスする必要があります。そして、図書館員には、この膨大な情報量（情報洪水という言葉もありましたが、慢性化したためか最近あまり耳にしません）の中から、正確で最新の情報を見つけ出すことが求められています。

これら以外にも、インターネットのもたらしたものは、多いことでしょう。また、取り上げたものは、肯定的に評価されるべきものと思いますが、逆に否定的な面があることも事実です。ネットワーク犯罪といったものへの対処とともに、著作権やプライバシーの保護にも充分注意を払う必要があります。しかしながら、現段階では否定的な面を認識しつつも、世界中からいろいろな形式の情報をリアルタイムで獲得でき、こちらからも発信できるという能力を、いかに図書館の側で活用できるかを考えていくべきだと思います。

(3) もたらしつつあるもの

以上のように、インターネットは、図書館の業務や業務システムに大きな影響をもたらしていますが、さらに、業務システムの基盤要素の一つである、文字コードについても、見直しをもたらしつつあります。これまでは、主に国内だけでの情報交換でしたので、細かな問題はたくさんあるものの、JISX0201、JISX0208、学術情報センターのEXC文字を扱えれば、図書館システムとしては十分でした。しかし、今後は世界中と情報交換をする必要があります。US-ASCIIだけで情報交換するのならば、現状でも対応可能ですが、ウムラウトやアクサンが外字ではない文字セット、簡体字の文字セット、ハングルの文字セット等を規格として採用しているシステムと直接情報交換するには、いろいろと問題があります。学術情報センターでは、この問題への対応も一つの目的として、新CATではJISX0221を採用しました。今後、まだまだ検討する点が残されていますが、インターネットのもたらした「対象の拡大」の一つとして、扱う文字の種類を拡大をあげることができます。そして、もたらされつつあるものの中では、図書館にとってもっとも重要なものが、この扱う文字の種類を拡大であるといってもよいでしょう。今後も、インターネット、あるいはそれに代わる新技術が図書館になにをもたらすのかを、注意深く見守りたいと思います。また、それとは逆に図書館の側が新技術を要求するようになっていかないかとも考えています。電子複写にしろ、機械可読にしろ、インターネットにしろ、図書館のために開発された技術というわけではなく、開発されたものを図書館が利用しただけというのが実態なのが少々残念だと思わないでもないからです。

(京都大学附属図書館システム管理掛／とみた・けんいち)

……(次頁よりつづく)……

今回は京大経済学部図書室の澤居さんです。皆さん御承知の人ですが・・・小生の学生時代以前からずっと経済の図書室のカウンターにいた(はず)です。では澤居さん、よろしく。

「数珠つなぎ」のルール

①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。

| 衝撃の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第4回

京都大学化学研究所
図書室まつのぶしゅういち
松延秀一 さん

こういうのを青天のヘキレキと言うのでしょうか。中村さんからの突然の御指名です。大図研では新人なのですが、職組図書館職員部会の新年会に顔を出したのが運の尽き？ま、冗談はさておき、昨年3月、小生の京大転任内定の情報が流れた時、見覚えある名前、そして顔を思い出した方もおられたことと思います。

履歴書風に書くと、京大文学部史学科現代史学専攻卒業、大学院では『原敬関係文書』の編集・出版に関与（日本放送出版協会から全10巻。第2巻あとがきに小生の名あり）。その一方、教育学部図書館学講座で司書資格取得。故・森耕一先生や塩見昇・渡辺信一先生等の講義に出席。国家公務員上級乙種図書館学試験に合格するも採用に至らず（この時、京大からの面接通知はなかった）、やっと大阪外大附属図書館で採用。以来11年、このほど母校に戻って来たと思ったら、なんと化学研究所へ放り込まれる。化学にはド素人、専門を無視されたのでは母校に戻って来た意味がないですね。ということで、職場については省略。仕事は主にNACISIS-CATで新収図書目録作成です。外大時代はNECのLICS-Uを使用、オリジナル入力が多かったが（ただしローカルのみ）、化研ではNACISISからのコピーが主です。外大はその後、JIPのLINUS-Uに変えたが、トラブル多発とのことです。

ところで、小生は外大採用以来、日本図書館協会（JLA）障害者サービス委員会委員です。小生自身難聴ですので、聴覚障害者の情報アクセスをどう保障すべきか考えることになります。小生は補聴器での会話はできますが、電話は無理（相手の顔が見えない）なので、学内の全図書室にはFAXを設置してほしいものです。また、京大には身体障害学生相談室があります（これは大学院時代に設置されました）。とは言え、図書館（室）としての障害者（学生）サービスの用意はあるかどうか・・・（他大学でも）。人員・予算が削減される中で障害者サービスに取り組むのは困難でしょうが、その中でどう工夫するか、大図研レベルでの取り組みがあってもいいように思います。JLAや図書館問題研究会（図問研）にはそのための委員会があり、大会では分科会が設営されています。分科会はむずかしいとしても、手始めに、手話や点字について学習してみるのも一方法でしょう。小生も手話は承知しています。JLA等の分科会で手話通訳を見るためです。組合や大図研の集まり、各種の研修に手話通訳がいたらすばらしいことでしょう。現在は夢物語ですが。

聴覚障害者サービスについていくつか文献を翻訳しています。『聴覚障害者に対する図書館サービスのIFLA指針』（JLA）、その他、『図書館雑誌』95年10月号、『大学図書館研究』48号にも掲載しています。なお、JLAの『図書館員選書』シリーズの一つとして『障害者サービス』（仮題）刊行準備が進んでおり、今夏あたりには出る見込みです。小生も編集委員となり、執筆の分担もしました。刊行されたら御一読よろしく。

話は変わって、『日本史研究』403号の編集後記に文学部のT助教授（先輩です）が、機械音痴なので端末は苦手、追いつくようつとめるしかないが、落後（マ）者が出ないように穏やかに進めてほしいと記していました。外大でも議論になりましたが、性急なカードレス化は考えものだと思います。